

北硫黄島石野遺跡の既存評価をマリアナ諸島考古学から検証する

島崎達也

(NPO 法人喜界島サンゴ礁科学研究所)

はじめに

火山列島（硫黄列島）の最北端にあたる北硫黄島では、大正時代に、すぐ南のマリアナ諸島のものと類似する石斧が収集されている。北硫黄島は終戦後に無人化したものの、1991年に積石遺構を中心とした石野遺跡が発見された。表面採集されたシャコガイと土器に付着した炭化物 2 点の放射線炭素年代測定の結果、石野遺跡は約 2,000 年前の遺跡であるとされ、また報告されている土器は、同じ時期にマリアナ諸島で使用されていた平底土器に類似する。石野遺跡は未詳の部分も多く、今後も調査研究が必要であるものの、紀元前後にマリアナ諸島から火山列島にオーストロネシア語族集団の移動があった可能性は、極めて高い。このことは日本国内で活動するオセアニア研究者にとって、極めて重要な発見である。

しかし、石野遺跡の公的な評価は、東京都による「沖縄方面との関係が極めて密接なものであったと思われる。」（早川 2005）というものである。この既存評価は適切だろうか。マリアナ諸島をフィールドとする考古学関係者として、これを検証し、石野遺跡を再評価したい。本稿は、先行研究を批評し、問題提起するものである。

1. 北硫黄島の概要

北硫黄島は、火山列島（硫黄列島）を構成する面積約 5.57 km²の急峻な火山島である。行政的には東京都小笠原村に帰属し、マリアナ諸島最北端のウラカス島から約 650km、小笠原村役場がある父島からは約 200km 離れている（図 1, 2）。豊かな自然環境が保全されていることから、2011年に世界自然遺産に登録されている。

明確な記録が残る範囲では、1543年にフィリピンからアメリカ大陸への西進を試みたスペイン船 San Juan 号が「Bolcanes」と命名したのが、火山列島の初出とされる（Levesques 1994）。1589年に作成された地図「Maris Pacifici」には、「Los Bolcanes」の記載がみられる。16世紀当時の火山列島は無人であったとみられ、筆者が把握する限り島民がいたという記録はない。火山列島は 1891年に大日本帝国の領土に編入され、北硫黄島は 1899年に入植された。戦時中の 1944年に島民は強制疎開により離島し、その後守備隊も引き揚げた。それ以来、北硫黄島は今日まで無人となっている。

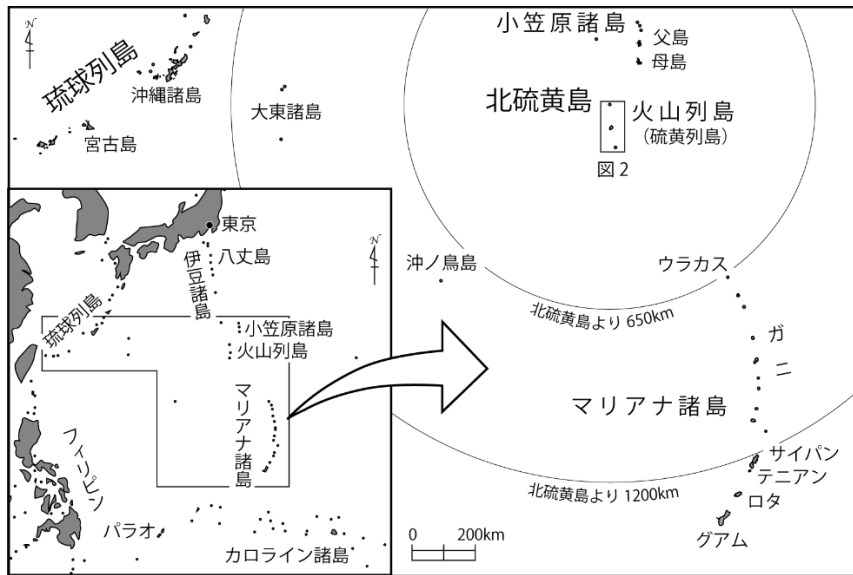


図 1 火山列島と北硫黄島の位置

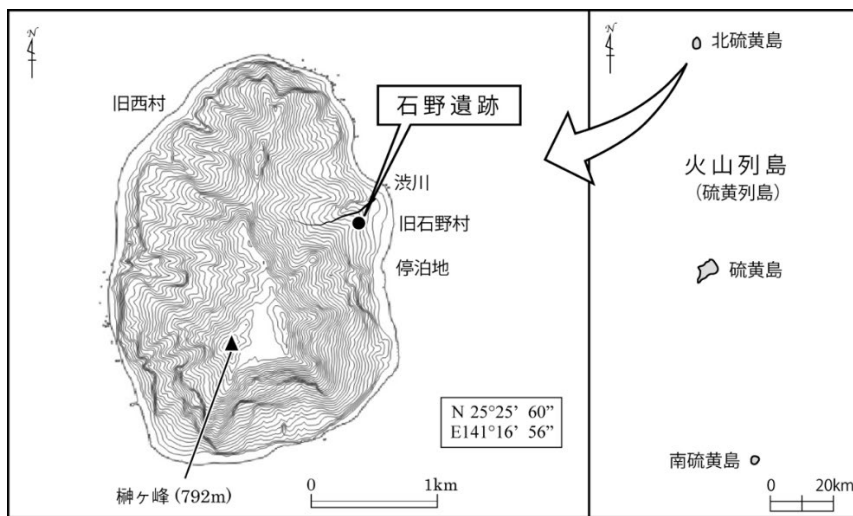


図 2 北硫黄島と石野遺跡の位置

20m 等高線図は国土地理院の基盤地図情報より作成。渋川の流路、村および停泊地の位置は「北硫黄島官民概略図」をもとに作成。

2. 問題の所在と本稿の趣旨

1989~1991 年（平成元~3 年）にかけて、東京都教育委員会が小笠原諸島他遺跡分布調査会に委託して小笠原諸島の島々と北硫黄島で分布調査を実施した結果、石野遺跡は 1991 年に発見された。1993 年には小笠原村北硫黄島石野遺跡他詳細分布調査団（以

下、調査団とする)による発掘調査が実施された。調査成果は、発見直後の1992年3月に刊行された分布調査報告書『小笠原諸島他遺跡詳細分布調査報告書』(以下、1992年報告書とする)と、2005年3月刊行の発掘調査報告書『小笠原村 北硫黄島石野遺跡』(以下、2005年報告書とする)の2冊により報告された。2005年報告書にて、石野遺跡の土器は、他地域と比較対照困難な独自の在地土器と評価されている(早川2005)。その一方で、積石遺構の存在から、石野遺跡は「沖縄方面との関係が極めて密接なものであったと思われる」(早川2005)と評価された。

ところが、先述した通り、石野遺跡の土器は、同時期にマリアナ諸島で使用されていた平底土器と酷似しており、これを系統不明とする2005年報告書は、その制作過程に問題があったと考えられる。よって、石野遺跡の既存評価は検証が必要である。筆者は、2015年3月にこの問題を把握し、それ以来、問題提起と再評価に向けた準備を慎重に進めてきた(島崎2019, 2021)。そして2024年に既存評価について公の場で問題提起するのに十分な準備が整ったため、各所で成果発表を開始した。本稿は、これら一連の活動と問題の要点を日本オセアニア学会の会員間で共有し、さらに世間に広く訴えるための問題提起としたい。

3. 2024年前半の成果発表について

3-1 日本オセアニア学会研究大会(島崎2024a)

3月24日の第41回日本オセアニア学会研究大会にて、石野遺跡の既存評価について初めて公の場で本格的に問題提起した。質疑応答では、調査団の調査支援者(分布調査時は参与)を務めた印東道子から、これほど遠く離れた隔離した島にマリアナ諸島から人類の移動があったことへの疑問、そして、沖縄方面からの文化的影響の可能性を排除すべきでないとの指摘があった。その際に、印東は1993年の発掘調査で得られた土器600点以上を見ておらず、2005年報告書の作成に関与していないとご教示いただいた。

3-2 考古学研究会記念誌(島崎2024b)

2023年に考古学研究会から、太平洋諸島の視点から「日本」考古学に問題提起をする絶好の機会をいただき、マリアナ諸島考古学の近年の動向を紹介するとともに、石野遺跡の既存評価に対する問題提起を執筆した。

マリアナ諸島考古学の研究史を数値化・可視化するために、マリアナ諸島のグアムにおける文化財関連の調査報告書等の年別刊行数を示すグラフを作成した(図3)。大半はグアムにおける埋蔵文化財(考古学)の調査報告書であり、マリアナ諸島考古学の研究史が膨大な数の調査報告書から成り立っているのがわかる。

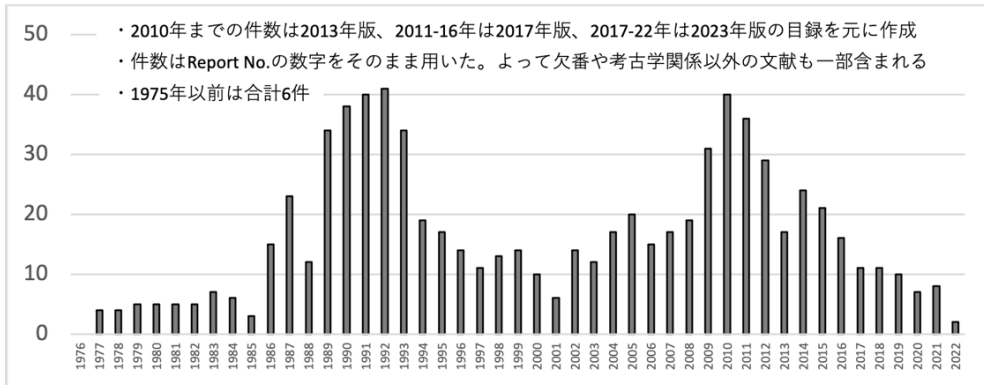


図 3 主にグアムにおける年別の文化財関連報告書等発行数（1976-2022年）（島崎 2024b より転載）。

3-3 考古学研究会ポスター発表（島崎 2024c）

4月20～21日にかけて岡山大学で開催された、考古学研究会の第70回研究集会のポスターセッションにて、ポスター発表の機会をいただき、石野遺跡の重要性と、既存評価における問題を指摘した。様々な分野の考古学関係者と直接意見交換した結果、石野遺跡の既存評価に対する問題提起は日本本土、沖縄、オセアニアの考古学関係者間でも広く受け入れられると確信したため、マリアナ諸島考古学の視点から石野遺跡の再評価を進めることを決定した。

4. マリアナ諸島考古学からの北硫黄島石野遺跡の再評価

現在、上記3件の発表内容をまとめて英文に再構成し、日本オセアニア学会の学会誌『People and Culture in Oceania』第40号に投稿中である（11月20日時点で査読中）。今後の調査成果も基本的には英語で発表する。ただし、石野遺跡は日本国内の遺跡であるため、その重要性は日本語でも発信し、日本国内で広く周知されなければならない。本章では、上記3件の内容を統合し、石野遺跡の既存評価に関する問題を広く情報発信したい。

4-1 現状と問題提起

前述の問題提起から、本章では論点を以下の3点にまとめ、石野遺跡の再評価を試みる。

- ① 土器の比較により、その系統を明確にする
- ② 沖縄方面との関係が強いとする既存評価（沖縄説）の根拠となった情報を整理する

③ 世界史から石野遺跡を評価する

4-2 ①土器の比較

石野遺跡の土器と、マリアナ諸島南部で出土する土器の特徴を比較する(表1)。2005年報告書(2005年3月刊行)の検証が目的のため、2004年以前に刊行されたマリアナ諸島の文献だけを用いた。

表1 北硫黄島石野遺跡と同時代のマリアナ諸島の土器比較

	北硫黄島石野遺跡 1-200CE頃	マリアナ諸島 500BCE-500CE頃 (2005年以降に報告された情報は含まない)
器形	器形は直立気味の深鉢を主体に、小型の鉢形土器や舟形土器が含まれる。いずれも平底。	浅く、垂直な壁の多様なサイズの平底土器群からなる。分厚い平鍋形土器(pan, griddle, robust ware)がこの時期の特徴的な器種。
口縁部	第1類:胴部の厚さ>口縁部の厚さ 第2類:胴部の厚さ=口縁部の厚さ 口縁部片83点は全ていずれかに分類される。	タイプA口縁(Unthickened rim) 胴部の厚さ≥口縁部の厚さ
厚さ	厚さ1.8~2.1cm以上の厚手の大型土器と、比較的緻密な薄手小型土器からなる(全体として厚さは0.6~3.5cm)	厚さ1.8~4.0cmの厚い器壁と底部を有する厚手土器がある一方で、薄手土器も存在する。厚手と薄手が混在するため、厚さの平均値と標準偏差は、他の時期の土器と比較して大きい。
口径	復元口径は21~65cmである(N=83)。63%は40cm以上、19%は50cm以上と大きく、楕円形の口縁を呈する可能性がある。	大型土器の復元口径は40~60cmになる。多くは片口状の口縁部を有し、楕円形を呈する。
混和材	胎土に岩片が大量に混入する、器壁の表面に無数のひび割れが生じた粗雑な土器。胎土に含まれる白色粒子は石灰質砂ではなく、非石灰質砂である(1992年報告書)。	CST(石灰質砂主体)またはMST(石灰質砂と非石灰質砂の混合)。厚手土器は多くの場合、胎土に大粒(径0.5~0.7cm程度)の凝灰岩質の混和材を含み、粗く脆くなっている。
器面調整/施文	横方向のナデ調整が認められる。施文は認められない。いくつかの底部片には網代圧痕が認められる。	多くは滑らかな調整。わずかな事例では口唇部に施文が認められる。いくつかの底部片には網代圧痕が認められる。
赤色土器	赤色顔料が2点で報告されている(No.91,104)。1992年報告書では複数の参加者が「赤色土器」等の表現を使用した。しかし2005年報告書の記述からは、赤色土器に分類可能な土器片はほとんど認められない。	赤色スリップの使用は紀元前から急激に減少しており、1CE以降はほとんど使用されなくなる。500CE頃には消滅。平鍋形土器の一部には赤色スリップが施される。
主要な出典	2005年報告書	Butler 1990, 1995, DeRoo and Goodfellow 1998, Moore 1983, 2002, Moore and Hunter-Anderson 1999, Sant and Lebetzki 1988

石野遺跡の土器は、同時代（紀元前後）のマリアナ諸島で主に使用されていた平底土器群と、特徴が極めて類似することが明白である。具体的には、器形、口縁部の形状、極端な厚手土器と薄手土器の混在、非常に大粒な混和材の使用などである。これは、紀元前後を示す放射性炭素年代測定の結果と整合的である。Dickinson (2006, 早川 2005, p.73-74) による混和材分析の結果から、マリアナ諸島から持ち込まれたのではな

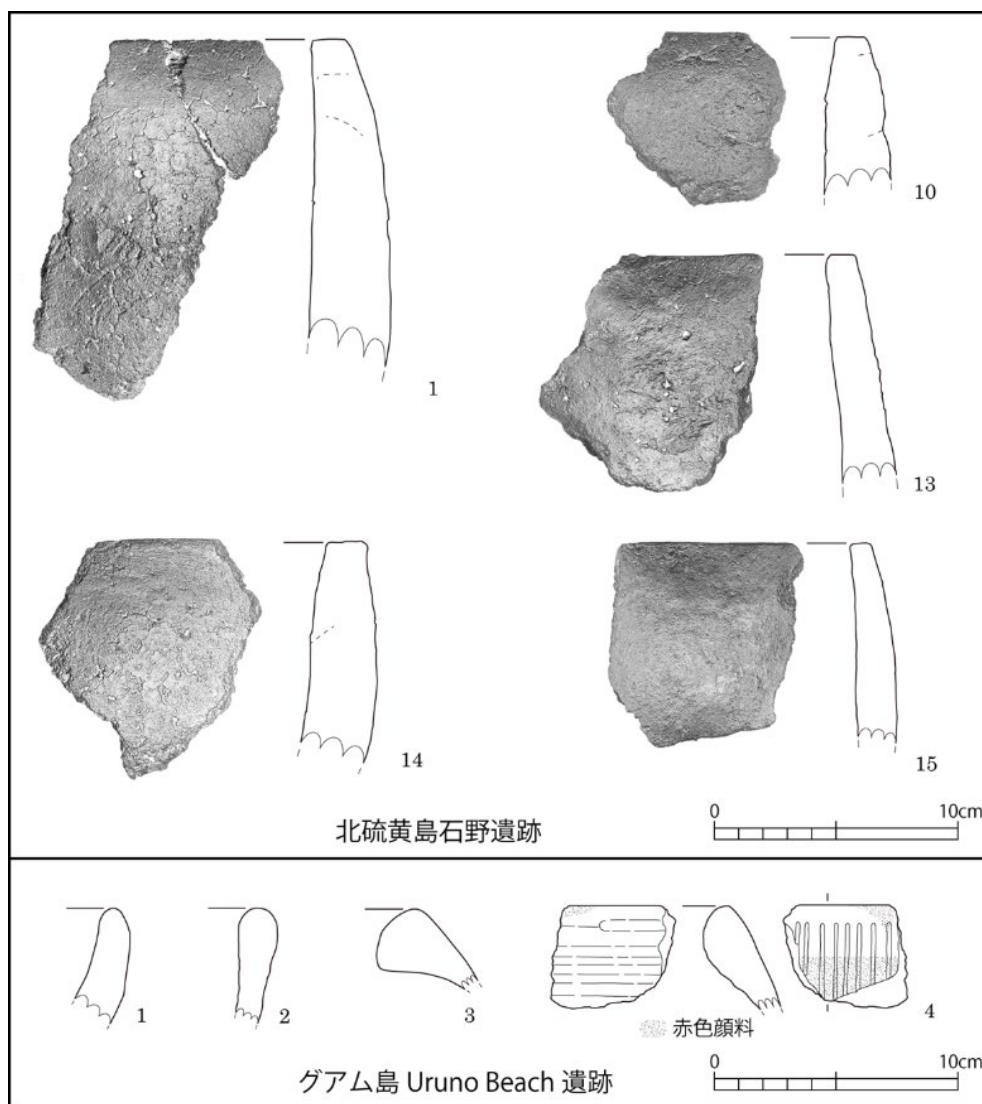


図 4 石野遺跡の土器とマリアナ諸島のラッテ期土器の口縁部比較

上：石野遺跡出土土器は東京都教育庁所蔵資料。番号は 2005 年報告書と対応。

写真はアプリ「ひかり拓本」を用いて陰影を撮影。

下：マリアナ諸島グアム島の土器は、ラッテストーン（Latte 3）周辺で表面採集した（Shimasaki 2015, Fig. 21 を一部修正）。1 がタイプ A 口縁、2～4 がタイプ B 口縁。

く、北硫黄島またはその周辺で現地生産されたものと強く推測できる。これを系統不明とした既存評価は、2004年時点のマリアナ諸島における土器編年を、全く反映していない。

1992年報告書にて印東（1992）は、石野遺跡の土器と、マリアナ諸島の先史後期に相当するラッテ期（800/1000～1521/1700CE）のMST土器との類似を指摘している。しかし、石野遺跡の土器には、ラッテ期土器の特徴であるタイプB口縁(thickened rim)や、分厚い丸底の底部片が認められないため、ラッテ期に由来する土器である可能性は極めて低い(図4)。なお、印東が所見を述べたのは、1992年の石野遺跡発見時に採集された9点についてである点に留意されたい。印東（1992）の所見は、1992年の段階ではやむを得ないものであるが、1993年の発掘調査で約600点以上ものまとまった土器資料が得られた時点で、2005年報告書刊行に向けて大幅な見直しが必要となっていた。よって、発掘調査の後にも印東（1992）の所見をそのまま無批判に参照し続けた調査関係者の動向(e.g.小田2019)は不適切である。

この件に関連して気になる点がある。先述した通り、1992年報告書(p.116)と2005年報告書(p.68)で、それぞれ約2000年前の放射線炭素年代測定の結果が出ているが、測定者は2件とも、石野遺跡の年代を「16世紀以前」と想定していた。小田は、上記の年代測定結果に対して「この年代は当初予定していた16世紀以前という年代観を大きく遡る結果であり、日本での弥生時代に相当する古さであった」(小田2019 p.168)としているから、これは測定者の勝手な想定ではなく、調査団の共通認識であったとみられる。この想定の本拠は明記されていないが、1992年報告書にて小田(p.104)と印東(1992, p.56)は、大正時代に北硫黄島で見つかった「円筒石斧」を、マリアナ諸島のラッテ期を中心とした新しい時期の遺物と評価しているから、調査団の内部に、石野遺跡をマリアナ諸島のラッテ期(～1521/1700CE)と関連付ける強い先入観が存在したことが想定できる。

4-3 注意：既存評価の問題点

図3は、1980年代以降にグアムなどマリアナ諸島で刊行された発掘調査報告書等の数の激増を示している。これには、論考や概説書、グアム以北の北マリアナ諸島(CNMI)における調査報告書は一部しか含まれていない。2005年時点のマリアナ諸島考古学を論じるためには、しかるべき文献を多数参照しなければならない。それにも関わらず、2005年報告書には、1983年刊行の日本語の書籍1冊(高山1983)しか参照されていない。この事実は、2005年報告書には、1980年代以降に急速に発展したマリアナ諸島考古学の情報が一切反映されていないことを示している。

小田静夫は、一連の石野遺跡調査の中心人物(東京都教育庁の学芸員、調査団では調査助言者)であり、石野遺跡についての著作を複数執筆しているが、同様の問題を抱えている。小田の退職は2003年3月であり、それ以前の小田の所見は、東京都教育

序の見解と同一視して差し支えないだろう。小田はマリアナ諸島考古学の研究史を1982年の「小笠原諸島の考古学」で丁寧にまとめている。しかし、その後の著作で参照されている1980年代以降の新しい文献は、マリアナ諸島の考古学関係者が執筆した文献に限るとわずか4件（Butler 1988, 1992, 1994, Kurashina et al., 1981）である。1998年の「考古学からみた小笠原の歴史」では、最も新しい引用参考文献は1993年のAchugao遺跡調査の概要（Butler 1994）であり、土器についてもマリアナ無文土器とマリアナ赤色土器の古典的な2分類のみを記載するなど、内容は1998年当時のマリアナ諸島考古学の土器観と乖離している（小田 1998, pp.158-161）。出土土器の詳細が記述されたAchugao遺跡の正式な発掘調査報告書（Butler 1995）は1995年に刊行されたが、小田は参照していない。現在と比較して最新の文献の入手が困難であった当時の時代背景は理解するが、小田は最近刊行した書籍（小田 2019）でも、これ（Butler 1994）よりも新しい文献を参照せずにマリアナ諸島の考古学を解説している。小田の著作から、彼がマリアナ諸島での調査数の増加を認知していたことは明らかである（小田 1998, p.59, 2019, pp.42,157）。マリアナ諸島考古学の解説に章を割いているにも関わらず（小田 2019 第7章「マリアナ諸島の考古学調査」）、小田はマリアナ諸島考古学の膨大な調査研究史の蓄積を無視し、少数の古い文献のみを用いて著作を執筆している。

調べた限り、石野遺跡の土器を最初に系統不明と明記したのは小田であり（小田 2000, 小田・水山 2002）、これが2005年報告書に反映されたとみられる。なお、小田が参考文献に挙げた先述の4件のうちのひとつ（Butler 1988）では、石野遺跡と同時期（約2000年前）のロタ島における、石野遺跡の土器と類似する平底土器の良好な資料が報告されている（Sant and Lebetzki 1988）。これは土器の研究史において重要な文献にも関わらず、小田は土器の類似を指摘していない。

以上、2005年報告書や小田の著作は、マリアナ諸島考古学の動向を適切に把握せず、石野遺跡の考古資料を正確に評価できない状態で執筆されたと言ってよいだろう。

4-4 ②沖繩説の根拠

石野遺跡の積石遺構は発見時から、シャコガイとサンゴが上面に置かれていたことを根拠に「祭祀遺構か墓地」（早川・小林 1992 p.36）とされ、2005年報告書では、弥生時代並行期の箱式石棺・土坑墓との類似から「沖繩方面と深い関係にあることを示唆している。」（早川 2005 p.73）と結論付けられた。マリアナ諸島との関係については否定的である（早川・小林 1992 pp.35-36）。小田静夫（1996, 1998, 2019）も、長谷部言人（1928）の遺跡類系を引用し、マリアナ諸島には「珊瑚礁塊を積んでプラットフォーム状にした遺構（中略）は認められない」として、沖繩説を補強した。しかし、マリアナ諸島に石灰岩礫を用いた積石遺構や石壁状遺構が存在することは、1960年代以降（Reinman n.d., 1977）現在まで複数の報告があるため、「この三タイプは現在でもマリアナ諸島の遺跡の種類をよく表現したものと言える」とする小田の記述は、先述の

文献調査不足に起因する事実誤認である。

もっとも、マリアナ諸島の積石遺構は、詳細な調査や図化がほとんどなされておらず、機能や時期は諸説あり詳細不明なものが多いため、筆者には、現時点で安易に石野遺跡の積石遺構とマリアナ諸島の積石遺構を結びつける意図はない。これらを墓とする既存評価は、現時点では否定も肯定もできない。しかし、マリアナ諸島に由来する可能性を最初から否定し、サンゴとシャコガイという、オセアニアの島々ではありふれた物質を根拠に、沖縄の弥生時代併行期の配石墓を比較対象として用いるのは、果たして適切だろうか。地理的に見ても、大東諸島を含む沖縄より、マリアナ諸島の方が北硫黄島に近いのである（図1）。さらに、石野遺跡の土器が同時代のマリアナ諸島の平底土器に似る点は先述した。敢えて遠く離れた沖縄の影響を主張するには、根拠があまりにも弱い。

4-5 ③世界史から石野遺跡を評価する

石器や貝製品等の検証も別途必要ではあるが、土器の特徴だけをみた場合、石野遺跡は、紀元前後にマリアナ諸島から北上したチャモルの祖先が日本国内に遺した遺跡とみてよい。遺跡の性格についてだが、石野遺跡の発見当時、マリアナ諸島島民が北硫黄島に漂着した結果（印東 1992）という仮説が提示された。しかし①「土器の比較」で示した通り、本当に土器を現地生産しているのであれば、偶発的な漂着ではなく、定住ないし季節的なキャンプ地など、計画的な利用の結果残された可能性も考慮しなければならない。マリアナ諸島から北硫黄島まで、オーストロネシア語族集団が敢えて北上した目的として、民族誌からは海鳥の採取が想定できる。17世紀にマリアナ諸島を訪れた西洋人は、先住民のチャモルが卓越した操船技術で島間を行き来していたこと、マリアナ諸島北端のウラカス島は当時から無人島であったものの、海鳥の狩猟場となっていたことを記録している（Levesques, 1996, p.86）。そして明治期の北硫黄島では、島民らが「鳥毛」を本土に移出していた（佐藤 1905）。石野遺跡があるのは、明治期に最初の居住地（石野村）が営まれた平坦地に近い場所であり、火山列島で唯一の河川や、現在も上陸時に使用される停泊地に近く、火山列島のなかでも特に居住環境に恵まれた好立地であったとみられる（図2）。実際、石野遺跡の発掘調査では鳥類骨が多く出土している。2005年報告書（pp.60-63）では種同定までなされていないものの、狩猟活動の結果である可能性は高いだろう。

加えて、石野遺跡には巨石を用いた積石遺構が存在する。1992年報告書で小林達雄（p.124）が指摘しているように、このような遺構の構築には、かなりの労力の投下が必要であり、相当数の人口が存在したことを示す。印東（1992）の漂着説については、確かにひとつの可能性として、大人数の漂着者が故郷に帰るまでのごく短期間にこれらの土器や積石遺構を残していった可能性は、完全には否定できないだろう。しかし、一般的に土器の制作は粘土の獲得から成形、乾燥、焼成まで時間と手間がかかる。そ

れにも関わらず多くの土器が生産、廃棄されている点からも、短期間の偶発的な滞在という仮説には、やはり疑問が残る。Hudson (2017) が既に提示しているように、人々が一定期間利用していたものの、遠隔地ゆえか、または資源の乏しさのためか、ある段階で放棄された絶海の孤島「ミステリーアイランド (Isolated Mystery Islands)」(Bellwood 1979, p.35, 印東 2002, pp.69-71) と解釈するのが、より自然ではないか。ともあれ、現時点ではいずれも仮説に過ぎない。

北硫黄島のすぐ南、マリアナ諸島北部の島々(ガニ)では近年調査が進展している。結果、ラッテ期(800/1000CE~)の遺跡は多く報告されているが、それ以前の遺跡は未発見である(Athens 2011, Athens and Leppard 2019, Carson 2016)。これらガニの島々は、グアムやサイパンなど開発に伴う緊急調査が盛んな南部の島々とは対比的に、ほぼ無人の離島であるため、調査の実施すら難しい地域である。よって、石野遺跡の存在は、ガニへの入植時期を検討する上で極めて重要である。紀元前後の時点でオーストロネシア語族集団が北硫黄島に進出していたのであれば、ガニも既に入植されていた可能性が高いからである。

更に視点を広げると、石野遺跡に人が住んでいた紀元前後は、それまで無人であった中部・東部ミクロネシアの島々に人類が入植していった時期でもあり(Carson 2024, Intoh 1997, 小野ほか 2022)、石野遺跡はその北限にあたる(図5)。古代DNA解析の

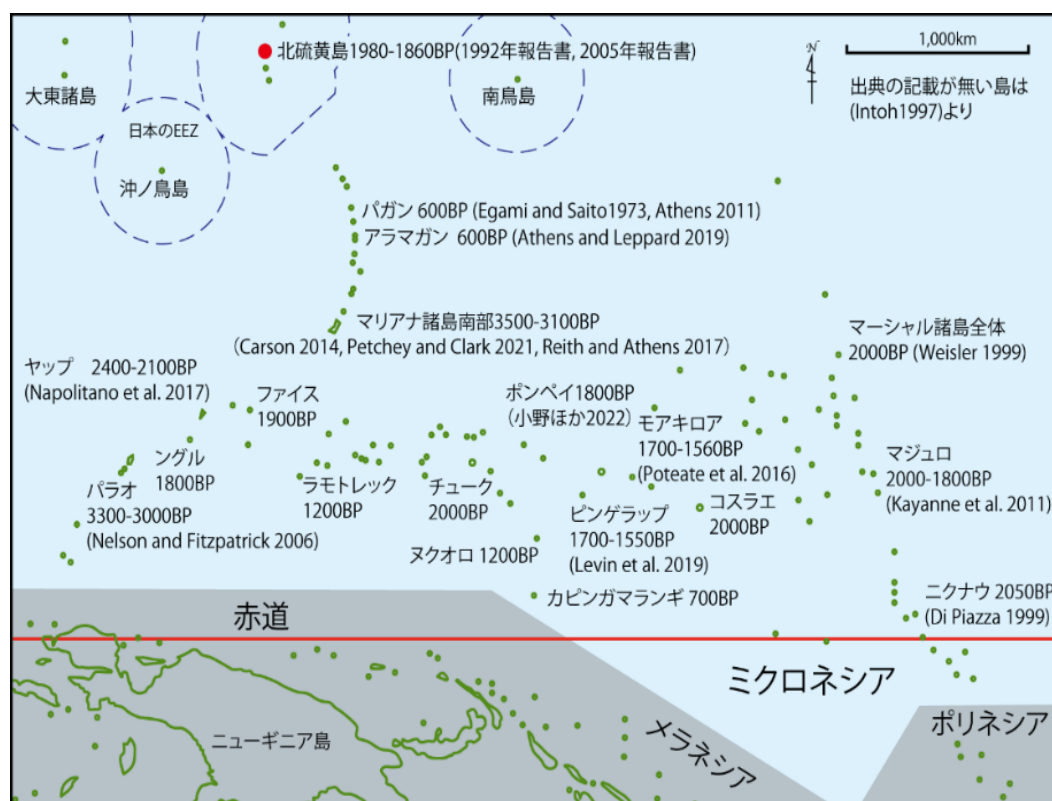


図5 ミクロネシア各島における初期居住時期(最古級の遺跡のおおよその年代)

分野でも、パラオ方面からマリアナ諸島に対して同時期（2400～1700BP 頃）に人類の移動があった可能性が指摘されている（Liu et al., 2022）。このようにマイクロネシアの島々を人々が活発に移動した時期に、最寄りのマリアナ諸島から北硫黄島になんらかの人類の移動があったとして、不自然な点はない。石野遺跡は、世界史のなかで慎重に評価されなければならない重要な遺跡であり、再評価と、正確な情報の国内外への発信が急務である。

5. 石野遺跡調査へのオセアニア考古学者の関与

東京都のような大規模自治体が刊行した調査報告書において、関連地域の考古学調査の過去 20 年間以上の蓄積が悉く無視されたことは異常事態である。調査不足や間違い、使用する文献の取捨選択で片付けられるものではない。石野遺跡が想定外の発見であればやむを得ないが、マリアナ諸島からの文化的影響があった可能性は、1992 年報告書で多くの調査参加者から提示されていた以上、最初から想定されていたのである。この事態は、マリアナ諸島で精力的に活動してきた考古学関係者に相談し、助言を求めることで容易に防げたのではないのか。そこで、オセアニア考古学者が石野遺跡の調査に関与した痕跡を精査してみた。

2005 年報告書には、印東道子が唯一のオセアニア考古学の調査支援者として明記されているが、前述のとおり、彼女は 2005 年報告書の執筆に関与していないと公の場で明言している。なお、1992 年報告書で印東（1992）が参考文献に挙げたマリアナ諸島関連の文献は、2005 年報告書で使用されていない。

1989～1991 年の分布調査の報告書では、オセアニア考古学者の名前が複数みられる。注目すべきは、1989 年の分布調査時に特別調査員として参加した Scott C. Russell である（小笠原諸島他遺跡分布調査会 1990, 1992 年報告書）。北マリアナ諸島（CNMI）の文化財保護行政機関（Historic Preservation Office）に所属していた Russell は、良質な概説書（Russell 1998）を執筆しており、簡潔ながら当該時期の土器や特徴的な遺物について記載がある（p.99）が、2005 年報告書や小田静夫の著作にはこれが参照されておらず、Russell の名前は 2005 年報告書にない。筆者が本人に直接確認したところ、現地調査には誘われたが参加できず、古い出来事ゆえ断言できないものの、石野遺跡の調査成果を読んだ記憶がないとのことであった（私信 2023 年 9 月 11 日, 2024 年 11 月 12 日）。

2005 年報告書に明確に関与したオセアニア考古学者は、Dickinson への土器胎土分析の仲介が明記されている高山純のみである（Dickinson 2006, pp.146,150, 早川 2005）。マリアナ諸島の土器の情報が 1983 年の高山の著作 1 冊のみを参照して記述されているのは、このためと推測される。しかし、高山の土器観は、マリアナ赤色土器を「紀元後 800 年ころまで使用されていた」（高山 1983, 1992, 2010）とするなど、1980 年代

以降に急速に精緻化した土器編年を反映しておらず、2005年刊行の報告書で参照するには注意が必要である。調査関係者であった印東や Russell ではなく、高山が2005年報告書の執筆に関与した経緯は現在調査中であるが、結果として、マリアナ諸島考古学の適切な情報が調査団に提供されなかった可能性が高い。

6. 結論

2005年報告書や調査関係者の著作にみられる従来の石野遺跡の評価には、マリアナ諸島考古学の文献が適切に参照されておらず、マリアナ諸島に積石遺構が無いという誤った認識を根拠にしている。土器を系統不明とする評価は、根拠を欠く不適切なものである。1980年代中頃から2000年代中頃にかけて、マリアナ諸島では多数の発掘調査報告書や論考、概説書が刊行されているにも関わらず、2005年報告書でそれらが参照されていないことは、調査団が当初からマリアナ諸島の影響を想定していたことと整合性がとれない。石野遺跡の既存評価は学術調査の成果として致命的な問題を抱えており、根本的な見直しが必要である。

石野遺跡の土器は、マリアナ諸島で同時代(500BCE～500CE頃)に使用されていた平底土器群が、北硫黄島周辺で現地生産されたものと強く推測できる特徴を有する。これは、2点の放射性炭素年代測定の結果(1～200CE頃)とも矛盾しない。今後詳細な調査が必要であるが、土器の特徴から判断すれば、石野遺跡はマリアナ諸島から北上したチャモルの祖先が遺した遺跡とみるのが妥当である。

一方、石野遺跡は沖縄方面との関係が密接だとする説は、現時点では根拠が乏しい。これは、沖縄の影響があった可能性を完全に排除するものではないが、既存評価が根拠とするシャコガイやサンゴは、オセアニア世界の大半の島々で豊富に得られる物質であり、北硫黄島にも生息しているため、これらが積石の上部や内部から見つかったことを、遠く離れた沖縄の配石墓と結びつけるのは、論理が飛躍している。

7. 今後について

本稿では、土器と積石遺構を根拠に、マリアナ諸島考古学の視点から、石野遺跡の既存評価の問題点を指摘した。今回扱わなかった石器や動物遺体も、1993年の発掘調査で多数出土しており、今後はこれらの再評価にも着手していく。そして近い将来、オセアニア考古学者が主体となって、沖縄県や東京都島嶼部の研究者の意見も取り入れた調査隊を組織し、この石野遺跡の発掘調査を実施しなければならない。石野遺跡がある北硫黄島は無人島であり、本土や父島・母島からの公共交通手段はなく、船の手配から始める必要がある。しかも、北硫黄島は世界自然遺産に登録されているため、環境保全を意識したさまざまな手続きや準備が求められる。事前の現地確認ですら膨

大な労力と資金、時間が必要となろう。日本国内におけるオセアニア研究の正念場である。

調査の実施には、地元小笠原村の方々の御理解、御協力が不可欠である。そして石野遺跡の再評価は、東京都の文化財保護行政にとって無視できない問題である。また世界自然遺産の登録地における過去の人間活動の全容解明は、世界遺産の評価に深く関わる内容であり、自然科学と人文科学双方の視点からの学際的な調査研究が必須である。ついては、東京都教育庁ならびに東京都小笠原支庁に対して、今後の調査への御協力・御支援を強く期待する。

8. 最後に

石野遺跡の調査は、1993年の発掘調査中に発生した事故により中断したという(2005年報告書, 東京新聞 2021)。事故の深刻さを考えると、調査中断はやむを得ないだろう。当事者にしか分からない感情や事情もあろう。しかし、公金を投じて大規模な調査を実施した以上、報告書はいつか刊行しなければならない。もし文献調査すらできないほどの状況だったのであれば、2005年報告書は事実記載だけにとどめるべきであり、書籍や論考の執筆などは早計であった。

幸いなことに2024年11月現在、風向きは確実に変わりつつある。筆者の一連の再評価の活動において、東京都教育庁の方々には、出土遺物の資料調査で丁寧に対応していただいている。また、マリアナ諸島や沖縄の考古学関係者や、日本国内のオセアニア考古学者、石野遺跡に興味を持つ他分野の研究者、そして石野遺跡調査に参加された一部の関係者など、多くの方々より肯定的なご意見や励ましの言葉をいただいたのは、既存評価を真正面から批判せざるを得ない若輩者の筆者にとって大きな追い風となった。さらに小笠原村役場の方々にも、本研究に興味を示していただいただけでなく、研究発表(島崎 2024a)における画像使用許可など親切に対応いただいた。感謝の言葉が見当たらない。なお、筆者の一連の問題提起に対して、文献の切り貼りに過ぎず、筆者の独自の調査研究成果ではないとの批判を、ごく一部より受けている。しかし、既存評価の問題点を整理しないままでは、石野遺跡の再評価はできない。本稿はあくまでレビュー論文であり、今後調査を進めていくための起点に過ぎない。既に資料調査は始動しているため、来年度以降順次成果を発表していく。

本稿執筆にあたり、資料の使用を認めてくださった Guam Department of Parks and Recreation (図3の元データ提供) および東京都教育庁(図4作成にかかる利用承認と掲載許可)の担当者の方々、30年以上も前の記憶を私信として発表してもよいと承諾してくださった Scott C. Russell 氏、研究大会で貴重な情報を提供してくださった印東道子氏、文章校正に協力してくださった重松希美氏には、感謝申し上げます。図4のうちグアム島の土器実測図は、公益財団法人高梨学術奨励基金の平成25年度若手研究助

成の成果の一部を使用した。

最後に、調査中にご逝去された2名の調査員と御遺族の方々に対して、心からお悔やみを申し上げますとともに、石野遺跡の全容を解明することをここに宣言する。

<参考文献>

- 印東道子 1992 「マリアナ考古学から見た小笠原一遺跡立地を中心に」『小笠原諸島他遺跡詳細分布調査報告書』東京都教育委員会:49-58
- 印東道子 2002 『オセアニア 暮らしの考古学』朝日新聞社
- 小笠原諸島他遺跡分布調査会 1990 『平成元年度調査概報 1 小笠原諸島他遺跡分布調査』
- 小田静夫 1982 「小笠原諸島の考古学」東京都教育委員会（編）『文化財の保護』14: 102-107
- 小田静夫 1992 「黒潮圏の先史文化」『第四紀研究』31(5):409-420
- 小田静夫 1996 「八丈の磨製石斧はどこからきたか（7）—黒潮圏の先史文化—」『学芸研究紀要』12:1-50
- 小田静夫 1998 「考古学からみた小笠原の歴史」『学芸研究紀要』14:1-82
- 小田静夫 2000 『南島文化叢書 黒潮圏の考古学』第一書房
- 小田静夫 2019 『世界遺産小笠原を発掘する 考古学からみた小笠原諸島の歴史』ニューサイエンス社
- 小田静夫・水山昭宏 2002 『発掘された小笠原の歴史』小笠原村教育委員会
- 小野林太郎・山野ケン陽次郎・片岡修・Jason Barnabas・長岡拓也・片桐千亜紀 2022 「東ミクロネシアにおける人類の移住年代と貝利用—ポーンペイ島での最近の発掘成果より」『東南アジア考古学』41:57-72
- 佐藤傳藏 1905 「新硫黄島視察談（承前）」『地学雑誌』17(10):702-727
- 島崎達也 2019 「マリアナ諸島における網代圧痕土器の予察的研究」『考古学研究』65(4):72-82
- 島崎達也 2021 「マリアナ諸島における網代圧痕土器の現状と課題」第38回日本オセアニア学会研究大会 2021年3月18日 口頭発表
- 島崎達也 2024a 「北硫黄島石野遺跡の発掘調査報告書における土器評価の問題」第41回日本オセアニア学会研究大会 3月24日 口頭発表
- 島崎達也 2024b 「テーマ15 太平洋諸島からの視点」『考古学研究会70周年記念誌 考古学の輪郭』考古学研究会
- 島崎達也 2024c 「マリアナ諸島考古学からの北硫黄島石野遺跡の再評価」考古学研究会 第70回総会・研究集会 ポスターセッション
- 高山純 1983 『ミクロネシアの先史文化 その起源を求めて』海鳴社

- 高山純 1992 「I 先史文化の時代 紀元前～一五世紀」『地域からの世界史 第17巻 オセアニア』朝日新聞社
- 高山純 2010 「マリアナ赤色土器」『[新版] オセアニアを知る事典』平凡社
- 東京新聞 2021年7月2日「北硫黄島「石野遺跡」 石の謎30年 先史時代の痕跡、調査中断のまま」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/114087>
- 長谷部言人 1928 「サイパン、ティニアン兩島の遺物及び遺跡」『人類學雜誌』43(6):243-274
- 早川泉 2005 「調査の成果」『小笠原村 北硫黄島石野遺跡』東京都教育委員会:70-74
- 早川泉・小林重義 1992 「北硫黄島石野遺跡踏査報告」『小笠原諸島他遺跡詳細分布調査報告書』東京都教育委員会:30-48
- Athens, S.J. 2011 Latte Period Occupation on Pagan and Sarigan, Northern Mariana Islands. *Journal of Island and Coastal Archaeology* 6(2):314-330.
- Athens, S.J. and Leppard, T.P. 2019 Settlement and subsistence in the Remote Western Pacific: Archaeological and radiocarbon data from Alamagan, Northern Mariana Islands. *Journal of Field Archaeology* 44(2):109-125.
- Bellwood, P. 1979 *Man's conquest of the Pacific: The prehistory of Southeast Asia and Oceania*, Oxford University Press.
- Butler, B.M. (ed.) 1988 *Archaeological Investigations on the North Coast of Rota, Mariana Islands*, Micronesian Archaeological Survey Report No. 23.
- Butler, B.M. 1990 Pots as tools, the Marianas case. *Micronesica Supplement* 2:33-45.
- Butler, B.M. 1992 *An Archaeological Survey of Aguijan (Aguijan), Northern Mariana Islands*, Micronesian archaeological Survey Report No. 29.
- Butler, B.M. 1994 Early prehistoric settlement in the Mariana Islands: New evidence from Saipan. *Man and Culture in Oceania* 10: 15-38.
- Butler, B.M. (ed.) 1995 *Archaeological Investigations in the Achugao and Matansa Areas of Saipan, Mariana Islands*, Micronesian Archaeological Survey Report No. 30.
- Carson, M.T. 2014 *First Settlement of Remote Oceania, Earliest Sites in the Mariana Islands*, Springer.
- Carson, M.T. 2016 *Archaeological Landscape Evolution: The Mariana Islands in the Asia-Pacific Region*. Springer.
- Carson, M.T. 2024 Chapter 10, The atoll highway of Micronesia, *Archaeology of Pacific Oceania: Inhabiting a Sea of Islands, Second edition*:229-243.
- Dickinson, W.R. 2006 *Temper Sands in Prehistoric Oceanian Pottery : Geotectonics, Sedimentology, Petrography, Provenance*. The Geological Society of America.
- Deroo, B. and Goodfellow, S.T. 1998 Ceramic Analysis. In: Dilli, B.J., Haun, A.E., Goodfellow, S.T. and Deroo, B. *Volume II: Data Analyses, Archaeological Mitigation Program*,

- Mangilao Golf Course Project Area, Mangilao Municipality, Territory of Guam*, Paul H. Rosendahl, Ph.D., Inc.:IV-11 - IV-185.
- Di Piazza, A. 1999 Te Bakoa site. Two old Earth ovens from Nikunau island (Republic of Kiribati). *Archaeology in Oceania* 34(1):40-42.
- Egami, T. and Saito, F. 1973 Archaeological excavation on Pagan in the Mariana Islands. *The Journal of the Anthropological Society of Nippon* 81(3):203-226.
- Hudson, M.J. 2017 The Ryukyu Islands and the Northern Frontier of Prehistoric Austronesian Settlement. *Terra Australis* 45:189-200.
- Intoh, M. 1997 Human dispersals into Micronesia. *Anthropological Science* 105(1):15-28.
- Kayanne, H., Yasukochi, T., Yamaguchi, T. and Yoneda, M. 2011 Rapid settlement of Majuro atoll, Central Pacific, Following its emergence at 2000 years CalBP. *Geophysical Research Letters* 38(20), L20405, doi:10.1029/2011GL049163
- Kurashina, H., Moore, D., Kataoka, O., Clayshulte, R. and Ray, E. 1981 Prehistoric and protohistoric cultural occurrences at Tarague, Guam. *Asian Perspectives* 24(1):58-68.
- Levesque, R. (ed.) 1994 *History of Micronesia, European discovery, 1521-1560, a collection of source documents. Vol. 1.*
- Levesque, R. (ed.) 1996 *History of Micronesia, Revolts in the Marianas, 1673-1678, a collection of source documents. Vol. 6.*
- Levin, M.J., Seikel, K. and Miles, A. 2019 A partial chronological sequence of human habitation for Pingelap atoll (Pohnpei State, Federated States of Micronesia). *Radiocarbon* 61(3):765-776.
- Liu, Y.C. et al. 2022 Ancient DNA reveals five streams of migration into Micronesia and matrilocality in early Pacific seafarers. *Science* 377:72-79.
- Moore, D.R. 1983 *Measuring Change in Marianas Pottery: The Sequence of Pottery Production at Tarague, Guam*, M.A. thesis, University of Guam.
- Moore, D.R. 2002 *Guam's Prehistory Pottery and its Chronological Sequence, Final Report*, International Archaeological Research Institute Inc.
- Moore, D.R. and Hunter-Anderson, R.L. 1999 Pots and pans in the Intermediate Pre-Latte (2500-1600 bp), Mariana Islands, Micronesia. In Galipaud, J.-C. and Lilley, I. (eds.) *The Pacific from 5000 to 2000 BP, Colonisations and Transformations*: 487-503.
- Napolitano, M.F., Fitzpatrick, S.M., Clark, G and Stone, J.H. 2017 New investigations of early prehistoric settlement on Yap, Western Caroline Islands. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(1), <https://doi.org/10.1080/15564894.2017.1335661>
- Nelson, G.C. and Fitzpatrick, S.M. 2006 Preliminary investigations of the Chelechol ra Orrak Cemetery, Republic of Palau:I, Skeletal biology and paleopathology. *Anthropological Science* 114(1):1-12.

- Petchey, F. and Clark, G. 2021 Clarifying the age of initial settlement horizon in the Mariana Islands and the impact of hard water: A response to Carson (2020). *Radiocarbon* 63(3): 905-913.
- Poteate, A.S., Fitzpatrick, S.M., Ayres, W.S. and Thompson, A. 2016 First Radiocarbon Chronology for Mwoakilloa (Mokil) Atoll, Eastern Caroline Islands, Micronesia. *Radiocarbon* 58(1):169-178.
- Reinman, F.M. 1977 *An Archaeological Survey and Preliminary Test Excavations on the Island of Guam, 1965-1966*.
- Reinman, F.M. n.d. *A Notes on an Archaeological Survey of Guam, Mariana Islands, 1965-66*.
- Russell, S. 1998 *Tiempon I Manmofo 'na: Ancient Chamorro Culture and History of the Northern Mariana Islands*. Micronesian Archaeological Survey Report No. 32.
- Reith, T.M. and Athens, S.J. 2017 Late Holocene human expansion into Near and Remote Oceania: A bayesian model of the chronologies of the Mariana Islands and Bismarck Archipelago. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 14(1), <https://doi.org/10.1080/15564894.2017.1331939>
- Sant, M.B. and Lebetzki, N. 1988. Chapter 11, Ceramics. In: Butler, Brian M. (ed.) *Archaeological Investigations on the North Coast of Rota, Mariana Islands*, Micronesian Archaeological Survey Report No. 23:179-253.
- Shimasaki, T. 2015 *Final Report For Hydrogeological and Archaeological Surveys at Uruno Beach Site, Guam historic properties inventory number 66-08-0011 Urunao, Dededo, Island of Guam, Micronesia : an investigation for prehistoric water utilization on a Latte period habitation site 2013-2015*.
- Weisler, M.I. 1999 Atolls as Settlement landscapes: Ujae, Marshall Islands. *Atoll Research Bulletin* 460: 1-51.